この街が好きだから

武蔵野スケッチ物語

絵と文
大須賀一雄

90

見慣れた風景も、絵になるとちょっと違う趣が出てきます。
そんな武蔵野の風景を、大須賀一雄さんが春夏秋冬で切り取って描きます。

御殿山一丁目にて

前回は、自作の回文「私、車中で注射したわ」を紹介したが、最近知った面白い回文は、「数学解くガウス」がある。これは東大生の作といわれ、和洋折衷の傑作だと思っている。

日本で有名な回文は、江戸時代の作といわれている「長き夜の とおの眠りの皆目覚め 波乗り船の音のよき哉」で、このほかに知られている回文は、次のようなものがある。

「元の名は 弓取りと見ゆ 花の友」、
「咲く数は 十日咲かうと 二十日草」、
「草の名は 知らずめずらし 花の咲く」

日本語は表意文字なので、英語のような表音文字よりも回文が作りやすいといわれている。ちなみに、英語の回文では「Madam, I'm Adam.」がよく知られている。

私が回文に興味を持ったのは、私の名前（大須賀一雄）が回文に近かったからであるが、もし皆さんも回文に興味があったら、ぜひ挑戦されてみてはどうだろうか。

＊回文とは、上から読んでも下から読んでも同様に読める文のことである

大須賀一雄（おおすか・かずお）　水彩画家。1937年群馬県出身。武蔵野市在住。画材は透明水彩。元JR東日本国際課勤務。JR東日本絵画クラブ初代事務局長。これまでJR東日本の駅の絵を1000点以上描き、新聞、雑誌、テレビなどでも紹介されている。著書は『あなたの街の駅物語』（日貿出版社）、『スケッチお手本帖』（素朴社）、『透明水彩の世界・ヨーロッパ』および『緑』（旅もようスケッチ会）ほか。2022年まで、JR東日本の大人の休日倶楽部のカレンダーの絵を担当。海外スケッチ旅行歴も長く、これまで50カ国以上を訪れ、個展も30回を超える。

武蔵野スケッチ物語

連載90回記念インタビュー

2001年春号からスタートした大須賀一雄さんの武蔵野スケッチ物語が、今回で90回を迎えました。大須賀さんのインタビューとともに、過去のスケッチを振り返っていきます。

「武蔵野スケッチ物語」が始まって23年。我ながら長く続けてきたなと思います。この連載では、家内が運転する車で買い物などに行く際に見かけて気になった場所に、後日出掛けて行って描くことが多いですね。

人工物と自然、人がバランス良く入る構図を見つけて、折り畳みイスに座って下描きから彩色までその場で行います。写真に撮って家で描くことはないんです。電柱や電線、看板なども日本の風景としてそのまま描きます。直線は定規を使わずフリーハンドで。よく見ると線が曲がっていたりするんだけど、その方が無機質にならずに味わいがある気がします。1枚の絵が仕上がるまで2時間から2時間半くらいでしょうか。最近では、スケッチをしていると『季刊むさしの』で私を知った方が声を掛けてくれたりして励みになります。

読者から「いつも歩いている道が優しく描かれていて温かい気持ちになりました」という声があったんですか？それは画家冥利（みょうり）に尽きますね。あと2年半で連載は100回。その時には、これまでのスケッチを集めた展覧会と講演会を市内で開きたいですね。それを目標に頑張りたいと思います。

大須賀さんが使う絵の具は
透明水彩。柔らかい色合いが特徴

PICK UP! 思い出の過去作品

❶2009年夏号
「吉祥寺北コミセン付近」

❷2016年春号
「境二丁目にて」

❸2017年冬号
「吉祥寺南町一丁目にて」

❹2018年秋号
「関前一丁目付近にて」

大須賀さんの
「むさしのTALK No.120」
はこちらから